

巻頭言

支部長 苫米地 司
(北海道科学大学学長)

建築分野では、建築物の豪雪被害が発生すると被害調査などが実施されるものの、継続的な研究が実施されない状況が長らく続いていました。こうした中で私自身、1981年に発生した「56豪雪」を機に、恩師の助言で「建築と雪」との関わりを研究テーマとした研究活動に従事することになりました。当時は屋外観測が主であったことから、「夏場に試験体作製、冬場に観測」を繰り返していました。これらの成果は、雪氷学会北海道支部研究発表会で発表することが常でありました。「北海道の雪氷」をみるたびに、30年以上も前の支部研究発表会で緊張しながら発表している自分自身の姿が思い出されます。その後も、毎年発表を続け、懇親会などで気象学や雪氷物理学を専門とする研究者の皆様との交流は、研究の進め方や測定手法の伝授の場でもあり、新鮮なものがありました。こうした環境の中で、建築分野の研究者も徐々に増え、「建築雪氷工学」と言える分野も構築され、自分自身の成長の場であったように思います。

時を経て、大学院生を指導するようになってからは、大学院生に雪氷学会北海道支部研究発表会での発表を必修とし、院生にも毎年発表をさせ、院生達の成長の場でもあったように思います。発表が終わると、「北海道の雪氷」に論文として投稿することになるのですが、院生にとって4ページの原稿は大変な努力が必要で、指導も大変だったことが思い出されます。当時は製本されて、表紙は齋藤新一郎さんの版画で飾られ、パラパラめくりながら自分自身の論文を見つけて、にんまりとしている院生の姿も懐かしく思い出されます。2011年には、北海道雪氷賞(通称「北の風花賞」)が創設され、2013年度には表彰規定の変更が行われ、「北の風花賞」、「北の六華賞」、「北の蛭雪賞」に細分されました。これらの賞は院生も対象になり、院生の受賞者も現れるようになり、大きな自信に繋がっていると考えています。

日本雪氷学会の支部活動は、公益社団法人化に伴って大きな変革期を迎えているように思います。さらに、研究拠点も一極集中から分散され、研究テーマも日常生活に関わるテーマから地球規模のテーマまで広がってきています。今後も、支部研究発表会を中心とした支部活動になりますが、このような変革期には、時代に見合った新たな展開も必要と思われます。支部活動の充実には、支部会員の皆様の忌憚のないご意見や積極的なご協力は欠かせません。今後とも、支部活動へのご支援をよろしくお願いいたします。